哲學研究　第七十號　第七卷第一册

社會の地域的解放

高田保馬

第一節　地域的解放の意義

社會の團結は常に或る程度に於て、而して低級の社會に於けるほど強く、住居地域の共同卽ち地緣と結び付いて居る。土地との聯絡の最も薄く見ゆる遊牧民族の社會とても固定的に一定の土地との聯絡の乏しきまでの事にして、成員の不斷なる地域的接觸なしとせば其團結想像せらるべくも無い。然るに人口の增加、文化の發達、成員の分化と云ふが如き相連れる一團の事柄に伴ひて、種々なる社會の團結が地域から解放せられる、云はゞ地緣が團結の紐帶として益々薄き意義を有するに至る。この事實を茲に稱して、社會の地域的解放と名づける。

血緣と地緣とは自然的なる社會の紐帶である。而も此二者の何れが重要の大にして又原始性の大なるかに關しては種々なる異論あるを免れず、今日探究し得らるゝ限りの低級蠻民の生活、並びに文明人の祖先の記錄遺物に徵するに、古き社會の組織が血緣的團結を基礎としたりと信ぜらるゝ點より推して、一般には血緣を以て原始的紐帶となし、地緣は後之に代りて結合となれるかに考へるのが一般的通說となつて居る。スタルケ、ムッケの如き人々にありて(或意味に於てはボサダにありても)は此通說が反對せられ、寧ろ地緣の原始性が主張せられて居る。此問題を解決せむとするのは今の仕事では無い。然れども所信のみを述ぶれば私は他の機會に於て論じたるが如く、地緣を以て最も原始的なる紐帶と考へる。而して、社會史的意義に於ては血緣が原始に於て特に重要であるが如く見ゆるに拘はらず、此血緣の結束根抵には常に地緣の結束が存在すと信ずる、加之血緣は地緣の全然自然的なると異に著しく人爲の分子を含み、社會の團結保持の上の一の工夫として設けられたるものに非ずやとすら考へる。此等の點は如何ともあれ、地緣の共同が團結を生せしめるのは何等の人爲、何等の文化をも俟たずして生じ來る事であり、從ひて存立せる一切の社會が何等かの程度に於て此地緣により制約せらるゝのは必然の運命である。

かくて地域的共同と云ふ事象は云はゞ私共の生活に於ける物欲の地位を占むる。身體的欲求は最も原始的のものとして與へられて居る、私共の生活の不斷なる努力は精神が此欲求より解放せられ之を支配せむとする過程に外ならず。然れども此完全なる解放と支配とは文化の極致、一の理念たるに止まる。これと同樣に、一切の社會の團結は皆地域によりて束縛し制約せられる、文化の發達は團結をして此地域と云ふ原始的制約より漸次に脱脚せしめる事、理性の物欲に對すると異ならぬ。然れども此解放も亦同じく到底十分なる事を得ない、完全なる地域的解放はたゞ一切の社會の向ひて進みながら永遠に達し得ざる標的としてのみ存する。

ジンメルによれば空間の唯一性、排他性を分享する社會がある。それは其占有する地域の廣がりと相融合し之と連帶的(solidarisch)なる姿を呈する。かゝる社會にありては、同一の地域に同種類に屬する他の社會の存在を許さず、蓋し之と一體をなせる空間は其範圍に於て唯一つのみ存するが故である。他の種類の社會にありては、一定の地域によりて場所的に制限せられるが、空間的に制限せられない、云はゞ空間を充たし之と連帶的なるに非ず、從ひて其排他性を分享する事無く同一の地域に同種類なる數多の社會の並立を許容する。謂ふに空間的のもの(das Räumliche)の內

には永久なるものと無時間的なるもの（das Ewige und das Zeitlose）との時間的對立に應ずるものがある。無時間的なるものは今、以前の問に觸るゝ事なく常に存在する事を意味し、永久的なるものは無限、不斷の時を意味する。空間的のものにして之に相應ずるものは、一方に於て超空間的形象（ユイバアロイムリツヘ、グビルデ）にして、それは空間との關係を有せず、そのあらゆる點に同樣の關係を有つ。他方に於てそれは、すべての空間點に同樣なる無關心的關係を有せず、到る所の空間と實在的連帶を形づくる。而して場所的に制限せらるゝも空間的に制限せられずと云ふ社會は前者を代表し、空間と融合せりと見らるゝ社會は後者を表はす。敎會と國家とは此二種の社會のそれ〴〵最も定型的なるものとして兩極端を示すものである。而して其他の社會はすべて、此二者の中間に位す、云はゞ die völlige territoriale Festgelegtheit より die völlige Ueberräumlichkeit, Möglichkeit eines Kondominiums までの種々なる段階上の一地位を占める(1)。

(1) Simmel, Soziologie, 1908, S. 614-620.

此立場に對して二の考ふべき點があると思ふ。一は國家と敎會とが果して兩極端をなすものと認め得べきやと云ふ事である。國家又は其內部に存すと認めらるゝ地方關係が其占有する地域と一體をなすかに考へらるゝには、自ら他の種類の社

會と異なれる性質あるに基く事云ふ迄も無いが、此點の考察は今姑く問題とせず、又國家が社會と空間との結合に於ける一極限をなす事も亦承認せられる。然れども空間との聯絡最も疎き社會として他の極限を形成するものが教會なりと許し得べきや。地域との聯絡の教會よりも遙に薄き社會が考へ得られる樣に思はれる。二は此二の極限の間に種々なる社會は段階的に排列せらるべき性質を有するにしても、其間の移り行きは必ずしも連續的のものに非ずして、種々なる定型が認められ、此諸定型の間には可なり著しき差異が考へ得らるゝに非ずやと云ふ事である。此等の諸點に關する私見を簡單に述べて見たい。

一方の極端に位するものは國家其他の地域團體である。これ等は所謂其占有する地域と融合せるかに考へらるゝものにして、從ひて空間の排他性を分享する。體統的組織の上に於て相異なれる段階に屬すと思はるゝ數多の社會の共存を許す事町村と洲、洲と國家、國家と聯合國家の如きものありとしても、同一段階に存するものの同一地域に於ける共同存立を許さない。他方の極端をなすものは所在を有すれども何等の意味に於ても地域的の廣がりを考へ得られざるものである。例へば株式會社の如き學會の如き、其他雜多の有意的社會（voluntary associations）はこれに當る。

これらは地域的廣がりを有せざるが故に如何なる輕き意味に於ても地域の上に於ける支配の觀念を伴はず、從ひて Möglichkeit eines Kondominiums の觀念を容るゝ餘地なきものである。私は國家に對する他の極端としてジンメルの擧げたる敎會よりも更に空間又は地域との緣薄き社會を此種のものに認める。此兩極端の中間に位するものは勞働組合の如き、敎會の如き、所謂 Kondominium の可能なる諸社會にして、地域的廣がりを考へ得れどもこれと相融合せりとは認められず、從ひて同一地域の上に數多同種類のものゝ共存が許される。勿論此中間に位するものにありては地域との聯絡によりて種々なる段階を考へる事が出來る。此段階は二の方向に於て認められる。一方は其廣がりの地域の大さ、他方は其內部の組織、これが茲に云ふ二の方向である。地域との聯絡の密接なる段階にありては、社會の範圍が狹小なる地域謂はゞ accidental limits of locality (2) によりて劃られ、從ひて地緣による結合の分子が著しく團結の構成に參加し、成員相互の結束は極めて複雜なる紐帶に基くのを常とする。地域との聯絡が此方向に於て疎緩の度を增せば、社會の廣がりは益々加はりて結合の可能なる全範圍卽ち一國民を蔽ふに至り、進みては各國民をも包括せむとする、同時に成員の結束は益々單純なる紐帶によりて支持せられ、地緣による結合の分子は

消失し行く。中世の地方的なりしギルドと今日の全國的なる勞働組合との差異は此對立を明確ならしめるであらう。地域からの解放の他の方向は社會內部の組織が地域的の廣がりを標準とせず、地緣以外の事情を標準として行はるゝに至る事である。全國的又は然らざるまでも甚だ宏大なる廣がりを有する此種の社會は內部に其一部分とも見るべき數多の社會を含む、此組織的成分とも見るべき社會の區劃が地域によりて仕切られる事もあるけれども、また、地域以外の事情によりて仕切られ、從ひて部分の各社會の紐帶が地緣以外のものである場合が生ずる。前者の場合にありては地域との聯絡が密接にして後者の場合にありてはそれが疎緩であると考へられる。然れども、普通此二種の組織方法は種々に相交叉し結合せられて實現せらるゝが故に、此見地からして地域よりの解放が二の段階に相分れると云ふ事は無く、數多の複雜なる段階を作る。他の地域的廣がりの大小と云ふ點より見たる場合の段階が連續的なる事は云ふまでも無い。此の如く內部に種々なる連續的段階を許すものではあるにせよ、此種の社會は地域團體の如く地域と融合せりと考へられざる點に於て一方の極限より遠ざかり、又株式會社の如く所在を有するに止らざる點に於てまた他方の極限より遠ざかる。後者との差異に關してはなほ一段の考

を要する樣に思はれる。宗教團體、職業團體の如きものは、何故に地域的廣がりを有すと考へらるゝか。此等の社會は其成員に一定の資格を必要とする、而して此資格を有する以上一定の地域に存するものはこれに屬する事を强制せられる、此强制は例へば我國の水利組合、同業組合等に於けるが如く法的のものたること稀に、多くは法律以外の社會意識の力による事、詳說を俟たず。從ひて資格を離れて考ふれば、地緣が必然的に此社會人の所屬を意味する。然るに抹式會社の如きに至りては全然此事がない。かゝる有意的社會にありては、一定の地域に居住する事と其社會への所屬との間に何等必然の聯絡が存在せず、たゞ其成員の地理的分布、又は機關の位置に應じて地域的所在が考へ得らるゝだけである。これ此種の社會が地點を有して地域的廣がりを有せずと考へらるゝ理由であらう。他方に於て地域團體は何故に地域と融合せるかに考へらるゝか。これは重に二の理由による。一方に於て一定地域に住する事が必然に其團體への所屬を意味する事、此團體が土地の上に何等かの權利を有すと考へらるゝ事これである。領土主權の考の如きは國家をして此種の社會の極限たらしむるに意義が深い。

(2) Maciver, Community, P. 254.

種々なる社會は地域との聯絡から見て以上述べたるが如き三の定型の何れかに屬せしむる事が出來る。而して此各定型の間には可なりの距離があり、其一方から他方へ漸次に轉移すと云ふ事は容易に生起し得ざる事實であると思ふ。從ひて、文化の發達に伴ひて部分社會の地域的解放が行はるとすれば、各定型に屬するものゝ內部にありては漸次に地緣によりて團結の束縛せらるゝ事が薄くなり、大體から見ては地域との聯絡の密接なる定型に屬する社會が漸次に其勢力と重要とを失ひて、他の定型の社會が新に增加し來ると云ふ二類の事實が出現しなければならぬ。部分社會の進み行きが此等の觀點から如何なる方向をとれるかを次に分析して見たいと思ふ。

第二節　基礎社會の地域的解放

私は他の機會に於て地緣と血緣とを根本の紐帶とする社會を稱して基礎社會と云つた。今日現に文明國に於て見る所の基礎社會はすべて地緣に基くものと見るべく、從ひてそれは地域團體として、謂はゞ其占むる所の地域と一體をなすかに認めらるゝ社會である。

古代に溯るほど社會の組織は少くとも其外見上血緣を中心とし、血族の關係に從ひて種々なる部分社會が形成せられて居た。而も謂ふに此血緣の支配は自然によりて與へられたる傾向に非ず、社會の統一を安固ならしめむが爲の一種の工夫（デイバイス）として成立したものである、原始に於けるほど社會の統一と相卽せられ得べく、從ひて社會意識の全部とも見るべかりし(3)宗教と此血緣的意識が密接なる聯絡を保てる一事は、私共をして此事を信ぜしめる。然らば、如何にして地緣が此血緣に取りて代り、殆どすべての基礎社會を地域團體化したるか、此過程は嘗て私が說明を加へたるが如く(4)『必要の原理』、『效用の原理』に外ならなかつた。詳言すれば國家の如き大社會の部分として混雜を極めゆく血緣以上に明劃なる區分を必要とし、簡單なる組織原理を有用とした。これがすべての國家に於て其內部の組織の血緣より地緣に轉じたる理由であると考へられる。ジンメルの如く血緣の排他性と國家の權力とが相容れず、又國家權力の對契たる不偏公平と云ふ事が空間を組織原理となす事を要求したりと(5)見るもなほ、『必要の原理』の作用と認め得らるゝであらう。然るに地域團體がよりて以て血緣の支配を破壞したる此『必要の原理』こそは、地域團體そのものゝ重要を失はしめ其影を薄からしむる事となつた。

(3) Durkheim, Elementary Forms of Religions Life, p. 223 et seq.
(4) 社會學原理八七〇頁以下。
(5) Simmel Soziologie, S. 692.

今日にありて、地域團體と相卽し得らるゝ基礎社會の最大なるものは國家である、家族は血緣が支配權を保留する最後の城砦とも見るべきであるが、それもまた著しく住居の共同に基く團結たる性質を帶びる。詳細に立入れば、住居の共同による家屬、家屬共產體 (Household, Hausgemeinschaft) と血緣の紐帶によりて結束せらるゝ家族 (Family) とは必ずしも相吻合せず、其區別を認むべきであらうが、茲には之に論及しない(6)。かくて地域團體化したる基礎社會は國家と家族とを最大、最小の制限として、其間に複雜なる段階を形づくる。而も文化の發達に伴ひて中間にある洲縣郡町村の如き地域團體は漸次に其重要を失ひ來り、云はゞ基礎社會の生命は兩方の周邊に集中して居る(7)。一方の理由としては社會的同化の爲に各地方團體の成員が集團的特性を失へる事を擧ぐべきであらうが、他方に看過すべからざるは機能の周邊に集中したる事である。それは種々なる社會的機能は最大の又は最小の基礎社會によりて營まるゝを必要とするものが多い。從ひて國家と家族との兩端に向ひて極めて多くの機能が偏り集まつた。其上、數多の部分社會が別に成立してかゝる中間

社會の機能を奪つた。然れども此二の周邊にたつものゝ中、家族もまた其團結に於て其機能に於て減衰の道を辿りつゝある事は私が他の機會に於て評論したる所である(8)。從ひて基礎社會について見る時、地域は其最後の社會的重要を國家の中に保留せりと云ひ得られやう。此點は數多の學者の等しく認むる所である。例へば、リシャアルは說いて云ふ、團結の『强度の見地より云へば共同社會的現象(les phénomènes communautaires ——これは種々なる基礎社會をはじめ、宗教團體、職業團體の如きものを併せ含む——引用の際附記)は同時に血緣を地域的共同との上に基きたる原始共同社會が分化するに伴ひて減少する。反對に、產業的知的協働の勢力は社會的範圍の擴がりと共に增加する。』一般的協働は血緣、地域及び利害の共通に負ふ狹き共同社會、個人的責任と意識とを吸收する小團體と相容れざるにしても、大共同社會と容れざるに非ず』(9)。かくて『弱まりゆくものは國家では無い。最屢々其反對に國家は益々其重要を加へ機能を加へゆく』(10)(註一)。

(註一)　リシャアルと略ぼ同樣なる立場にありと見るべき、否かく云はむよりも、リシャアルの所說のよりて成立したるテンニイス說にありては、別の機會に於て述べたるが如く、國家の運命に關する見方がリシャアルに於けるが如く簡明で無い。國家は一方に於て一定の目的の爲にする一般的の利益社會的團結(die allgemeine gesellschaftliche Verbindung)として、他の利益社會と對立するが、他方に於ては和益社會そのものであり、一々の理性的なる利益社會的主體の概念と共に與へられ居る所の社會的

理性である。詳言すれば、此後の意味に於て、國家はそれ以外の特殊なる人格と對立する事なく、統一の姿に於ける利益社會であり、之に關係してのみ他の人格が存在を認めらるゝ所の絶對的人格である(11)。此の如く見來れば、利益社會が犧牲社會又は共同社會に代りて支配的勢力を占むるに至る以上、其全統一として見たる國家が滅裂の道を辿ることは考へられぬ。然れども國家が現存の國民的諸國家として理解せらるゝならば次の如くに云はれやう。利益社會の發達と共に、理知と正義との上に基礎を置ける輿論(öffentliche Meinung)、即ち國家の境を超ゑたる妥當性を要求する規範の勢力は加はり行く。而して之に伴ひて國際的世界的の團結は促される。最終の目標としては『國家の複數を廢し世界市場と同一の廣がりを有する世界共和國を建設して之に代へむ』とする事が考へられる。勿論かゝる傾向と計劃とは明瞭にして純粋なる表現を得ず、況んや其實現をや(12)。然れどもかゝる大體の傾向のみは認められなければならぬと思ふ。要するにテンニイスがリシアルの云ふ如く、國家の重要が益加はると云ふ如き單純なる主張を試みざりし事は明である(13)。

(6) Giddings, Readings in Descriptive and Historical Sociology, 1906,p.504-508.

(7) Simmel, Sociologie, S.724

(8) 社會學原理一〇七九頁以下。

(9) Richard ,Sociologie générale, 1912,p.274.

(10) ibid. p.266,245.

(11) Tönnies, Gemeinschaft und Gesellschaft, 1887, S. 264-270.

(12) ibid. S.272.

(13) Richard, op. cit. p. 275.

國家が近世に入りて新に其集結の程度を進め、一方に於て集權的傾向を加へたると共に、他方に於て著しく其機能を增加せしめたる事は疑を容れざる事實である。此一點のみより見れば、すべての基礎社會が其影を薄くし全社會生活の地域的解放

に向ふのに對して、全然相反對せる方向に進む唯一の例外であるがに考へられる。然れども、此傾向を永久的のものと確信すべき何の根據も無く、加之、之を以て一時的のものなりと信ぜしむべき事象は眼前に展開せられつゝある。家族が家長的大家族の形態に展開したる事も今日の小家族に變じ進みては此小家族の衰頽をすら招來すべき準備段階に過ぎざりし如く、今日の國家機能の集中亦之に似たる趣を有せずとは誰か論斷し得やう(14)。デュルケムは今日の國家を以て、餘りに宏大にして之と個人とし距離餘りに遠しとなし、個人は之に對する時無力なる塵の如きものなると共に、國家の統制は必要なる詳細に亙るを得ず、個人は委棄せられ非道德化するが故に、之を救治すべき策は職業團體的分權を行ふにありと說く(15)。然れども、デュルケムにありては一の希望に止りし所の所謂 la décentralisation fonctionnelle は刻々に實現の勢を示しつゝある。デュギイは既に『すべての經濟的社會的機能は漸次に社會的諸階級に分配せられつゝある、國家の機能は必然に日々減少しつゝ』あるのを見ると云ふ(16)。實に吾人が最初に着眼すべきは勞働組合乃至は職業團體の社會的意義である。十八世紀以來の自由主義は常に國家對個人の對立を考ふる事によりて個人の自由を救はむとした、而して近世の自由主義の之と異なる所は國家と團體を對

立せしむる所にある(17)。此對立に於て最も意味あるものを國家と勞働組合の對立とする。デュルケムも又はジョオレスも、職業團體をば國家の一組織單位たらしめむと考へたるに拘はらず(18)。實際的運動は此の如き事を以て餘りに微溫的なりとし、國家と獨立なる勞働組合の形成、之による國家機能の簒奪にまで進みつゝある(19)。

(14) Adolf Menzel, Begriff und Wesen des States; Handbuch der Politik, Bd. I. S. 45.

(15) Durkheim, Suicide, p.448.

(16) Duguit, Le droit, le droit individuel et la transformation de l'état, p. 43.

(17) Barker, Political Thought from Spence: to Today, 1915, p. 182.

(18) Durkheim, op cit., p. 439; cf. Sorel, L'avenir socialiste des syndicats, chap. II.

(19) Sorel, loc. cit.

今茲にサンディカリズム、ギルドソシアリズム、乃至はボルセヴィズムの運動及び理論に立入る事は餘りに議論の中心を遠ざかると共に、かゝる小篇の一部に於て試みるべき事でも無い。然れども、此等の運動が生きたる現實であり、社會の將來が幾分かは此方向に動く事を否定し難い。勿論來るべき未來がエンゲルスの云ふ國家の死滅にあるか、コオルの云ふコンミュウンであるか、又は國家と勞働組合との協調であるか、これは私の議論の範圍外であるにしても、勞働組合を中心として其他の部

分社會による機能の吸收が國家の社會的意義を薄からしむる方向に動きつゝある事だけは確實である。かくて私は謂ふ、國家も亦減衰する、基礎社會の地域的解放が過程に於ける唯一の例外をなすものに非ずして、此過程の最後の完成者と見るべきである。此減衰は決して國家の死滅を意味するのでは無い。此點に就いて一言を附け加へたいと思ふ。

國家と云ふ言葉は極めて複雜なる意義を有する。私の見る所によれば國家の概念の中に含まるゝ要素に次の如きものがある。(一)地域團體、(二)統治詳言すれば統治機關の具備)、(三)階級的紋取、これである。而もこゝに云ふ統治と云ふのが二の成分より成る一は管理には單純なる行政(デュギイの所謂 contrôle, surveillance 又はサンシモンの administration des choses ギュイヨオの une simple administration (20) 二は權力による強制と見られる。權力による強制と階級的絞取とは相表裏するもの、同一事象の兩面として考へらるゝが故に、結局次の如く分析する事も出來る。(一)地域團體二管理(三)階級的支配の三者卽ちこれである。而して社會主義者ならびに多くの學者は國家の本質を第三の要素に認める。例へばグムプロヴィッチによれば『國家は多數者に對する少數者の支配の組織である』(21)。而してこの支配 (Herrschaft) は單なる强制

(Zwang)と異なり、一階級が他の階級に對する絞取を意味する、全體の安寧秩序の爲にする、強制は支配を意味しない。さてかゝる國家概念の種々なる要素を認むる時、初めて所謂國家の死滅の意義が理解せられる。エンゲルスによれば、『階級的背反に基礎を置きたりし從來の社會は國家を必要とした。』即ち國家は特殊階級の機關である。從ひて『抑壓せらるべき何等の社會的階級が無くなるや否や、また階級的支配と現在の生産の無政府的狀態に基礎を置く個人の生存競爭並びに是等の事より發生する衝突と暴行とが取除かるゝや否や、抑壓せらるべきものは何物も存せざるが故に、特殊の抑壓的權力たる國家は最早必要が無い。』『人の支配は物の行政と生産過程の遂行に代る。國家は廢止せらるゝに非ずして死滅するのである』(22)。然れども、これは所謂社會主義的社會に於ける階級的支配の消滅を意味するものである、決して地域團體、管理の二要素を伴ふ社會の消滅を意味するものでは無い。私は地域團體、管理の二要素の存する所なほそこに國家の存在を見る。デュギイは謂へらく、ベルトの云へる如く國家は死せむとす、然れども死せむとする國家はそのla forme romaine, régalienne に過ぎず、更に一層宏大にして人道的なる他の形態の國家が其代りに成立する(23)。たゞサンディカリストのみは一切の意味に於ける國家の死滅を信

じ得る。若し彼等によれば、地域的組織と見るべからざる勞働組合の自治的聯合がそれ自體の統制を行ひ、何等國家と云ふが如き他の團體による管理を必要せざるが故である(24)。

(20) Duguit, Le droit social, le droit individuel et la transformation de l'état, p. 43; Weill, L'école saint-simonienne, p. 191-192; Y. Guyot, Economie de l'effort, p. 279.

(21) Gumprowicz, Grandriss der Soziologie, 1905, S. 193; Oppenheimer, Staat, passim; Duguit, op. cit. p. 42.

(22) Engels, Socialism Utopian and Scientific, p. 76-77.

(23) Duguit, op. cit. p. 46; cf. Mouvement socialiste, octobre 1907, p. 314.

(24) Sorel, L'avenir socialiste des syndicat, 1898, chap. II; cf. Janvres, Socialism et paysans, p. 118; Durkheim, Le suicide, Etude de Sociologie, p. 439 et seq.

第三節　社會的錯綜と地域的解放

一般社會の地域的解放は一方に於て前節に述べたるが如き基礎社會の減衰によりて行はるゝと共に、他方に於て、而して之よりも遙に重要なる意義を以て、種々なる派生社會の分化、錯綜によりて行はれる。

基礎社會以外に於て、種々なる類似、機能を中心とする部分社會の成立する事その

ものが一般社會の地域的解放を意味する、蓋しそれは從來地域的接近の基礎の上に於てならでは行はれざりし社會の形成を地緣以外の他の基礎の上に行はしむるからである。此の如くにして成立したる社會は一般の場合としては其成員の範圍が基礎社會のそれと相異に從ひて、二種の社會の相交錯するを常とする。然れども、例へば中世に於ける敎會と國家との如く、又はジンメルの示せる所のフランダアスに於ける地域團體と宗敎的團結との如く(25)。進みてはギルドソシアリストの考ふる國家とナショナルギルド、或は種々なるギルドと消費者結合、健康上文化上の結合等との如き(26)。成員の範圍が全く相合致する事もある。然れども、此等の場合に於ても、地域團體たる都市又は國家以外に於て成立したる部分社會は一定の類似、又は目的を中心として形成せらるゝ限り、地緣を離れて存續するものと考へ得る。少くも同一地域の人々の中此類似又は機能に與らざるものあらば團結の外に立つべしと云ふ可能が意識せられて居る。此の如き社會の形成そのことが既に社會の地域的解放を意味するのみならず、同種の社會の發達の方向がまた最も明確に此解放の道行を示す。マクイバアは此點に關して次の如くに云ふ。各社會は『統一的要求を追求する、其成員は彼等がたゞ其要求に與るが故にのみ成員となる、而

して社會は共同活動と相容れうる限り、其要求の共同なるすべての人々を包括せむと賢くもつとめる。此包括、淨化の過程は共同社會の範圍の擴大によりて可能となる。共同社會の範圍小なるほど(社會の紐帶たる)利害を簡單且つ純粹ならしむる事困難である。』『結社は地方、階級、進みては國民と云ふ偶然的制限を超越するほど純粹なる形となる。この事は近代の勞働組合の進歩によりて例證せられる。それは最初地方的なりしが、漸次に國民的となり、遂に或點に於ては國民の範圍をさへも超越せむと力める。その發達するに連れて其要求は益特殊的となり益明瞭となる。類似の要求の存する所これを達成せむが爲に結社せむと求める』(27)。

(25) Simmel, a. a. O., S. 615

(26) Cole, The Future of Local Government, 1921, p. 174.

(27) Maciver, op. cit., p. 254.

此の如く此種の部分社會は最初狹き地域に限られ、漸次に廣き範圍に亙るに至る。而して此範圍の擴大と共に紐帶の縮少が實現せられる、卽ち從來一定の部分社會を支持したる數多の紐帶の中、類似にせよ又は機能にせよ、其中心的のものゝみ殘留して、附加的なりし其他の紐帶は脫落する。此事が一方より云へば廣き地域に亙る結合を可能ならしめ、他方より云へば、廣き地域に亙る結合の爲に要求せられる。此事

は一般の形式論理學に於て、內包の小なる事と外延の大なる事とが相關の關係に立つと頗る趣を同じくする。然ども、吾人は部分社會の地域的擴大がたゞかゝる過程によりてのみ行はると考ふべきに非ず。例へば、勞働組合に就いて見るに、一定地方に於ける甲の組合內部に於て、分業の發達の爲に仕事の甚だしき分岐を生じ、此分岐せる夫れ〴〵の仕事に應じて新なる組合が獨立に、又は甲の組合の部分として成立する事ありとする。此際人數の都合又は其他の事情にて自然他の地方に於ける同樣の仕事の人との團結が形成せられ、組合の地域的擴大が行はれる。此事は職業別組合に就いて說きたるが、產業別組合に關しても同樣の事が考へられる。また宗敎團體の分化に就いても全く之と同じき過程を認め得る。謂ふに成員の不斷なる分化によりて部分社會の增加し行く事は重にかゝる道行に負ふのでは無からうか。而して、立入りて考ふるに、此場合にありては、結合紐帶の內容は減少せずして寧ろ增加してゐる。前と同樣なる類推を求むれば、槪念の內包の大を加へたるが爲に外延は減少してゐる。而も此外延の減少、卽ち結合の相手の乏しくなれる事がかへりて之を廣汎なる地域に求めしめ、從ひて部分社會の地域的擴大を來して居る。かくて部分社會の發達に伴ひて其紐帶又は結束する所の利益はマクイバアの云ふが如く、

"simple and pure" となるものと限る可きに非ず。雜多の附隨的紐帶一定の部分社會をして多方面の結合たらしめ、從ひて之を狹少なる地域に束縛したりし紐帶は漸次に脫落する。かくて部分社會は廣き地域に亙るのであるが、此場合にありては紐帶が簡單且つ純粹になると見られやう。然れども、紐帶の純粹性が保たれたる以上、此紐帶が分化し複雜化する事によりて部分社會の分化が行はれる。此場合社會の紐帶は決して簡單となるに非ず、寧ろ其內容を加へ複雜なるものとなる。結局、部分社會の地域的擴大は中心的紐帶から附隨的紐帶が脫落する點より見れば單純化によりて行はれ、中心的紐帶の分化して新しき社會を作る點より見れば其複雜化によりて行はる。此後の點はマクイバアによりて看過せられたるが如く、ジンメルによりても亦看過せられて居ると信ずる(28)。

(28) Maciver, op. cit., p. 254; Simmel, a. a. O., S. 746ff.

然れども此二の過程は全く截然として相分たるゝのみにして何等其根柢に共通なるものを有せざるやと云ふに、私はこれを以て單一なるものゝ二の表現として取扱ひ得ると思ふ。それは卽ち結合生活の合理化である。一定の方面に於ける類似又は利益の共通を中心として部分は自ら形成せらるゝ傾向を有する。然れども古、

き事情の下にありては此紐帶に他の附隨的紐帶が不可離に結合してたゞ多方面的の結合を許しまたかゝる結合のみを存立せしめる。獨り合理化の過程が理知熟慮によりて人々を動かすに至り附隨的紐帶をこれより分離せしめ、從ひて一方面的にして地域的に廣汎なる範圍の結合を生せしめる。而も更に進みて、此合理化の過程は地緣、血緣及び其他の附隨的紐帶の如何に關せず、一方面の事情に本づき結合の相手を求めしむるが故に、成員の分化進むに及べば、複雜なる內容を中心とする團結の相手を遠隔の地に求めしめ、從ひて部分社會の地域的廣がりを大ならしめる。

然れども地域的の廣かりを有する部分社會の地域的解放は前にも述べたるが如く、たゞ此廣がりの擴大によりてのみ行はれず、また內部組織の非地域化と云ふ方面をも有する。狹小なる地域に限られたりし一社會が漸次に一地方的又は全國的なるものとなるに連れ、內部の組織の爲に更に部分的なる社會が其所謂區分として存立する事を必要とする。此區分は勿論地域を中心として行はるゝ事を得べく、其際部分社會の體統的組織は國家及び大小の地方團體の關係の如く同心的諸圓周の姿を呈する。他の區分はこれと異なり、根柢に於て地域の線に沿はず、類似又は機能の線に沿ふ。勿論かくて成立したる內部の社會はまたその組織の必要上地理的區分

を設くる事はありとしても、全體の組織の第一次的區分が地域との關係を立てる點に於て著しく地域よりの解放を意味し、此部分社會全體をして地緣から獨立したる姿を呈せしめる。而して、所謂附隨的紐帶の拘束を蒙る事多き場合に於て此種の社會のとる組織は前者にして、かゝる拘束の消失し、結合生活の合理化行はるゝに及びて生ずる組織は後者である。例へば、佛蘭西に於ける勞働總同盟の組織を見るに、一方に於ては各地方々々に於て自治的なる地方的勞働組合を有すると共に、他方に於ては、機能又は類似によりて分立する種々の勞働組合が各全國的なる團結を形成し、以て同盟の非地域的區分を形成して居る。此の如きは內部組織の非地域化に一歩を進めたるものと認め得られる。また例へば、コオルは將來國家に代へむとするコンミユウンを描いて五六の會議卽ち機能社會の對立聯合より成立せしめて居る。此各社會內部の組織に於ては地理的區劃を無視する事能はず、寧ろ之を重視する傾向すらもある。然れども、其全體の組織に於ける第一次的區分が地域の線に沿はずして機能の線に沿ふ事はこのコンミユウンをして聯合的一機能社會たるかの觀あらしむるほどに非地域化せしめて居る。國家が此の如き機能社會の聯合に分解せらるゝ時、地域社會たる點に本質の一部を有せる國家そのものは消失すと認められ

やう。固よりかゝる計劃の實現の可能不可能は問題とする所では無い(註一)。

(註一) コオルのコンミユウンは嚴密に云へば國家に取代るものでは無く、國家、勞働組合、及び今日特に重要なる幾つか機能社會に取代ると見るべきであらう。たゞ大體の見方としてのみ、國家に取代ると云ふ事が許される(29)。

29)

此の如く地域的廣がりを有する部分社會は其廣がりの增大に於て、內部の組織に於て、益地域より解放せられ行くのみならず、地域的廣がりを有せざる部分社會は刻々に增加して、社會一般の非地域化と云ふ大勢に寄與する。此事に關しては別に說明を要せずと信ずる。而してかゝる統一的團結そのものに行はるゝ變化は固より社會一般の地域的解放から見て重要なる事實には相違無きも、其全部に非ず、更にこれが根柢ですらも無い。統一的團結そのものが人々の結合の大海に於ける表面的なる波紋、又は泡沫に止まるが如く、前者に於ける非地域化は後者に於ける非地域化の表現に過ぎぬ。然らば此根柢とは何ぞや、それは個人的結合の非地域化である。而してかゝる事實を齎すものは何ぞと云ふに、謂ふにこれ全體社會の人口增加に伴ふ社會的密度の增加であらう。別の機會に於て說明を加へたるが如く、社會的密度の增加は人々の關係を疎緩にする、此事は大都市の生活によりて最明に例證せられ

るが、更に低き仕掛に於ては發達せる社會の全部に亙りて認めらるべき事柄である。社會的密度は接觸する相手の頻繁なる交代を意味し、其間の親密なる結合の成立し得ざる事を意味し、從ひて相互の關係が疎緩となるを免れず。此疎緩は相互の結合の强さと範圍とを云はゞ合理化する。卽ち共通の類似利益が結合を有利とし又結合を必要ならしむる限度に於てそれが形成せられ、其他の云はゞ偶然的紐帶による團結の分子を極めて稀薄ならしめる。かゝる合理化は一方に於て、相互關係の疎緩なるに及べる事が人々をば親密にして犧牲的なる團結より解放し、其個性及び個人的境遇に從ひ共通の類似利益の存する所に結合を可能ならしむる事實に負ひ、他方に於て、此疎緩が社會的密度の增加と相俟ちて競爭を烈しからしめ、此競爭の烈しさは特に經濟的交易的生活に於て次に生活の全範圍に於て、理知熟慮打算による活動を强ふるが爲に吾人の結社的生活亦此影響を蒙る事に負ふ。

而も此個人的結合の合理化は必然的にこれをして遠隔の地域に亙りて成立せしめる。かゝる合理化の行はれず、從ひて、一定の類似利益の共通は結合を成立せしめ得べきに拘はらず、其他の地線又は血緣等の偶然的紐帶の之に伴ひ親密なる團結を可能とする場合に非ざればぼ相互の間が無交渉に終りし時とは異に、今や偶然的紐帶

の如何を問はず、類似利益の共通と云ふ條件の存する所結合は確立せられる、從ひて如何に遠隔なる人々との結合も實現せらるゝに至る。これは部分社會について概念の內包小を加ふると共に外延其大を加ふに似たりと云へる場合に當る。更にまた、分化已むことなき社會の姿を想定せよ。各人は其個人的結合の相手を近き地域に求め得ざるに至る、而も結合生活の合理化にして行はるゝ限り、これを極めて遠隔の地點に求め得るであらう。此點亦部分社會に關して述べたると趣を同じくする。而も私共は此結合の合理化によりて生じたる地域的解放がまたそれ自體結合生活の合理化を强からしめる事を考へなければならぬ。對面は常に感情の烈しきを伴ふ。激烈なる反感憎惡が對面によりて釀成せらるゝが如く、結合の親密さ、溫みは對面に伴ひて生じ對面によりて深めらる。これが對面の結合又は所謂人格的結合primary groups 等が其他の結合より區別せらるゝ所以である。而して相互の距離の遠ざかるに連れて此對面に伴ふ親密さを缺ぐのみならず、此距離の意識そのものが感情を冷靜ならしめ結合を機械化する、云はゞ理知の地盤を離れず、その上に相手との結合を營むに至る。かくてジンメルによれば、空間的に餘り離れたるものゝ關係が靜かさ、穩當、感情の乏しさを示すを常とするが、この事が素朴の考へには距離の直接

なる結果と見える。投拋による運動が通過したる距離に連れて弱まるのが單なる空間の長さの結果と見るのと正に趣を同じくする。實際に於ては、距離が感情の興奮强烈を去らしめ、結社の心的過程の總體に於て知的のものに支配的地位を與へる。而して知的の分子が優位を占むる事によりて成立する結合は rein sachlich-unpersönlich のものにして、ganz auf die Intensität des Gemütes gestellt のものに對立する(30)。

(30) Simmel, Soziologie, S. 641-644.

要するに個人的結合は漸次其多方面性親密性を失ひ、疎緩となり一方面的となると共に、地域的束縛を脱離して極度に遠隔なる距離の間に成立する。所謂結合の空間的緊張力 (die räumliche Spannungskapazität einer Vergesellschaftung) は既に國民の範圍を超えて世界的たらむとしつゝある。統一的團結は大抵此個人的結合の網の織られたる所に之を根柢として成立する。部分社會の錯綜や其國際化は此個人的結合の地域的解放の一表現と認むべきであらう。

第四節　全體社會の地域的解放

全體社會を構成する部分的結合は文化の發達に伴ひて益弛緩する、而も此部分的

結合の弛緩は寸毫の全體社會も團結の弛緩を意味せず、二者の間に平行の關係が認められぬ。然れども、地域的解放に關しては二者の間に平行がある、部分的結合の非地域化はやがてまた全體社會の非地域化として考へられやう。

全體社會は云はゞ種々なる結合の網の自足的組織である、而も此自足と云ふことが程度的のものなるが故に、全體社會にも種々なる程度のものがある。而して今日の場合に於てその最も十全の姿を呈するものは國家と範圍を同じくする國民であり、その內部に種々なる部分的低次的の全體社會が含まれる。かゝる全體社會の非地域化と云ふ事は二を意味し得る。一は低次の部分社會の範圍が地域によりて限られざるに至る事にして、他は最も包括的なる全體社會が一國家一地方の範圍によりて制限せられず、愈世界的のものに化する事である。前者の意味に於ける地域的解放は必ずしも文明の極致に於てのみ存せず、印度のカスト然り、古代に於ける氏族制度然り。將來に於て職業の範圍が今日の地域に代りて部分的なる全體社會の範圍を限るとするも、それは茲に問題としやうとは考へぬ。私が今考察を加へむとするのは、包括的なる全體社會の國家の範圍から脫逸せむとする傾向である。

器に水を盛れば其水多きにつれて必ず外に溢れる。國家又は民族の範圍を以て

劃らるゝ全體社會の內部に於ける社會的密度は漸次其濃さを加ふるに連れて必ず外部に向ひて溢れざるを得ない。其溢れ行く方向には二つある、一は類似の線に向ひ他は差異の線に向ふ。少しく此事に說明を加へて見たい。全體社會の內部には社會的密度の增加に伴ひて、著しき分化を生ずる。これは嘗て述べたるが如く一方に於て成員そのものゝ分化にして、他方に於ては階級分業等云はゞ社會的構造の分化である。何れにせよ、此分化の進むほど各人は他の全體社會內に於て自己の類似者を見出す事容易に、所屬の全體社會內に於て之を見出す事難きに至る。この事は種々なる個人的結合を數多の全體社會に亙りて錯綜せしむる事となる。これのみに止らず、分化の進みゆく事は人々の差異をして相補充する必要とを多からしめる。然るに拘はらず、全體社會內部に於ける社會的密度の增加は此內部に於ける競爭の激烈を生じ、此競爭は自ら人々を驅りて外部の全體社會の成員との間に補充的關係に立たしめる、交易は其最も著しき場合である。要するにかくて內部の社會的密度は溢れて外部に及び茲に種々なる全體社會の間に個人的結合の網が交錯する、而も此網が織らるゝところ、自ら其上にまた種々なる統一的團結が形成せられる、種々なる會社、學會、敎會等は各全體社會を連絡する部分社會として、國際的意義を有するに

至る。すべて全體社會の團結は三の部分より成り立つ。其一は全員を包括する統一的團結にして、其二は部分社會の錯綜、卽ち嘗て名づけたる堆環的結合である、而して其三は個人的結合である。然るに以上述べたる所よりすれば、各國民の間には個人的結合は稠密を加へゆく傾向があり、部分社會の錯綜また其間を縫ひつゝある。此背景の上に二種の注目すべき事實が將に現はれむとしつゝある。其一は人類を通ずる全員的團結の形成にして、其二は數國民を一團となす機能社會の形成である。たゞ此全員的團結の形成は事頗る容易に非ず、國際聯盟の如きは無限の後代に於て完成せらるべき世界的社會の素描に過ぎざるものである。數國に跨る種々なる會議、同盟、協定の如きこそは更に注目に値するものであらう。これらは數國民を成員とする種々なる機能社會の形成と見るべきであらう。而して此種の社會がそれ〴〵範圍を異にして成立し相交錯するに及べば茲に一種の堆環的結合が人類の內部に成立する事となる、バアンスが之を重視する事誠に故なしとしない(31)。かくて全世界に亙る全體社會は此の如く種々なる部分的結合の錯綜によりて刻々に準備の道を急ぎつゝあるものと考へられる。全體社會の地域的解放は實に部分的結合の地域的解放によりてのみ完成せられるのである。(一九二一、一一、一四)

(31) Delisle Burns, The World of States, p. 89 etseq.